

丹生都比売神社（にゅうつひめじんじゃ）

大和水銀がいつ頃から生産されていたかははっきりしないが、宇陀地方の辰砂採取は少なくとも4～5世紀には丹生氏が採取していたようだ。ただしこの頃は露天掘りだったようで、水銀の本格的な坑道採掘は6世紀後半に秦氏によって始められ、この宇陀の地は秦氏の管轄下におかれたようである。宇陀の水銀採取は平安初期にはお終わり、その後は伊勢の水銀に代わっていった。

[奈良というところは、私の論文「邪馬台国と古代史の最新」の第1章に書いたように、水銀と切っても切れない関係にあったのである。](#)

大和宇陀地方にたくさんある水分神社（みくまりじんじゃ）は、元来、辰砂採掘地の縄文神を祀っていたが、後に水分神社と言う名称が与えられ、今では、農業神、水の神を祀る神社と思われている。

[丹生都比売神社（にゅうつひめじんじゃ）は和歌山県かつらぎ町上天野（旧天野村）にある。](#)天野大社ともいわれて、紀伊の国一の宮である。海拔500mの山上とは思えない朱に塗られた雅（みやび）な神社が森に囲まれた、とてもいい環境の中にある。この地は盆地で水田は青々として、小鳥のさえずりが聞こえ、時間がゆったり流れている、ここはまさに桃源郷である。ここのコメは[天野米](#)産地として有名である。

白洲正子は、その著書「かくれ里」（1991年4月、講談社）の一節「丹生都比売神社」で、「まだかまだかと思ううち、峠を二つばかり越えたところで下り坂となり、いきなり目の前が明るくなった。見渡す限り、まばゆいばかりの稲の波だ。こんな山の天辺に、田圃があろうとは想像もしなかったが、それはまことに天野の名にふさわしい天の一角に開けた広大な野原であった。もしかすると高天原も、こういう地形のところを いったのかも知れない」「ずいぶん方々旅をしたが、こんなに閑でうっとりするような山村を私は知らない」「できることならここに隠居したい。桃源郷とは正にこういう所をいうのだろう」・・・と書いている。

水銀朱を採掘する人達が神と崇拝したのが、この丹生都比売神（にゅうつひめじんじゃ）で、その祭祀を司ったのが「丹生氏」と言われているから、伊勢水銀関係の技術者がこの大和水銀の地にやってきたのであろう。そして、この天野高原に集落を形成したようだ。現在、「天野の里づくりの会」というのがあって、素晴らしいホームページを作っているので、ここに紹介しておきたい。

http://www.katuragi.or.jp/amano_satodukuri/

皆さんも是非一度「天野の里」にお出かけ下さい。そして、丹生都比売神社（にゅうつひめじんじや）にお参りし、古き時代の大和水銀朱に想いを馳せて下さい。

ところで、白州正子には、多くの名著があるが、上記の本は私の愛読書であり、その天野高原に関する記述を一部紹介したので、この章の最後に、白州正子について少し書いておきたい。

私は、私の電子書籍「100匹目のさるが100匹」で書いたが、今西錦司は学識の他に特別の直観力を持った人である。今西錦司の他には、白州正子を除いて、そのような人を私は知らない。白州正子は、もちろん今西錦司とは学術分野が違うけれど、彼女もその専門分野の学識については群を抜いている。「能のこと」「能面のこと」「十一面観音のこと」「木や花のこと」「美に関すること」などを語らせれば、彼女の右に出る人はいない。その上、白州正子は、今西錦司と同じように特別の直観力が働くようだ。上記の「かくれ里」の解説で、青柳恵介が「文献の上からは何ほどのことも言えないその思想の芽生えに白州さんは目を凝らす。＜黙して語らぬ木や石＞がとうとう口を開くまで目を凝らす。」と述べているが、彼女はまさに特別の直観力を持っているということだろう。彼女のその直観力は、小さい頃から能を舞い、能のもっとも奥深い水準まで能を舞い続けたが、その中で培われたものであろう。しかし、彼女は、遂に、女性なるが故に遂に能を舞うことを止（や）めた。何故、女性が能の奥義を究めることができないのか、私にはとても説明できないが、彼女はそれを達観したのである。頭でそう考えるのではなく、身体がそう考える、それが直観である。白州正子は、今西錦司と同じように、直観の人である。彼女の著作には、他の追従を許さない学識と直観力によって、目から鱗（うろこ）が落ちるような真実がちりばめられている。上記の「かくれ里」には、大和水銀についていろいろと書かれているので、以下にそれを紹介しておきたい。彼女の歴史観に狂いはない。以下に紹介する彼女の記述はそのまま信じて良いと思う。彼女は次のように言っている。すなわち、

『 明恵上人の遺跡を回っていた頃は、度々紀州を旅行して、紀ノ川と有田川ぞいに、いくつもの丹生の地名と社があることに気がついた。西国巡礼の途上では、若狭の遠敷（おにゅう）を訪れ、お水取りの元である「若狭の井」を見たが、そのとき遠敷が丹生の転化であることを知った。越前の丹生郡にも、大丹生、小丹生という地名がある、といった工合で、それぞれ「丹生」に思い出のある私は、その都度なつかしい感じを持ったのである。いうまでもなく、丹生は朱砂と辰砂を意味し、その鉱脈のある所に「丹生」の名称がある。朱砂は煮詰めると水銀になり、水銀をまた煮ると朱砂に還元するという、不思議な性質を持っているが、不老長寿の薬とされたのも、そういう所から出た思想だったかもしれない。西洋で発達した錬金術に対して、東洋では煉丹術（れんたんじゅつ）が、科学の基礎となった。丹は薬の他にも、塗料や顔料に用いられ、鍍金（とぎん）にも欠かすことのできない

原料だが、播磨風土記には、神功皇后が新羅へ出発する際、爾保都比売（にほつひめ）の命から。赤土を船や鎧に塗ることを教えられ、軍に勝ったという話があり、呪いのためにも盛んに用いられた。古墳の内部に朱を塗るのも、悪魔除けと防腐剤をかねている。それほど需要の多い鉱物が、不思議な霊力をもつ神として、崇められたのは当然のことといえる。そして、朱砂を採掘する人びとは、木地師や金勝族とともに、太古から日本の国土に住みつき、神聖な職業にたずさわっていた。日本に多くの丹生の地が見られるのも、彼らが朱砂を求めて放浪した、その足跡を語るものといえよう。松田寿男氏の研究によると、丹生神社は全国に138カ所もあるそうで、半分以上が和歌山県に集中しているという。ちめいはそれよりずっと多く、遠敷の例を見ても判るように、入、丹保、仁宇、荷尾、玉生、船生など、みな丹生の転化であり、入はシオとも訓（よむ）ために、塩のついた所もあやしいという。』

『 弘法大師が高野山を開いた時、丹生都比売に案内されたこと、その画像が高野山にあること、私が知っているのはその程度で、紀ノ川すじを取材しながら、たえずこの神のことが気にかかった。聞くところによれば、紀州に70以上もある丹生神社の、総社は伊都郡天野にあり、天野大社とも丹生都比売神社とも呼ばれている。』

『 今昔物語によると、弘仁7年、弘法大師が高野山を開くにあたり、聖地を求めて巡歴するうち、大和の宇智郡で、一人の漁師に出会った。（中略）大師が尋ねる場所を教えようと言い、犬を放って紀州の山へ導き、そこで「山の王」に会い、山中に百町ばかりの領地を譲り受けた。名前を聞くと、我は「丹生の明神」と名乗り、漁師は「高野明神」と答えて消え失せたという。（中略）吉野から高野にかけては、水銀の鉱脈が多い。弘法大師はそこへ目を付けたので、漠然と仏教の聖地を求めたのではあるまい。良弁が金勝族を統率したように、弘法大師は丹生族と密接な関係を持ち、世紀の大事業を成し遂げたのであろう。』

『 天野大社は、いってみれば高野山の奥の院に当たるのだ。古い形式は、無言の内にその経てきた歴史を物語る。今昔物語の説話など、史家は単なる伝説として退けるであろうが、高野山の草創に、丹生一族が大きな役割を果たしたことは、参道の地理だけ見ても判ることである。神社の前には、丹生都比売の墓と称する古墳もあった。（中略）古墳は確かに丹生都比売のものか、そうでなくても丹生氏の祖先を祀ったものに違いない。』

『 神社の裏手には、沢の社というささやかな神社があった。大きな木に囲まれた社で、ここから清水が湧き出ており、神社の前の池となり、川となって、末は紀ノ川へ合流していく。だいたい水銀の出るような所は、川の上流と決まっているから、水銀が採れなくなれば、丹生都比売が水の神（ミズハノメや龍神）に変身することは、自然の成り行きであらう。』 ・ ・ ・ ・ ・ と。